

は事実としても、忘れてならないのは主体はわれわれ自身であり、自らが行動を起こさなくてはならない、ということだ。お互い横浜市民であることを認め合った上で主張すべきは主張し、譲るべきは譲る―権利と義務意識の平衡感覚がとれた市民でありたいと思う。人口増も沈静化したこれからの時代、象徴としての港を通じ新たなハマツ子意識を持ちたい。そして「次代に誇りを持って受け継げる横浜建設を」。一人ひとりに課せられた使命は決して軽くない。

(神奈川新聞記者)

都市づくりに経済人の知恵と経験を

鶴岡 博 (金沢区 39歳)

大学時代東京で生活し、大阪で就職した私が、生まれ故郷横浜へ舞い戻って十三年の歳月が過ぎた。住んでみると横浜は、非常に住みよい。横浜人の人の良さで寛容さは、東京人のみえっ張りや、大阪人の抜け目のなさ比べれば、付き合っていて気持ちまで晴ればれするときがある。しかしながら、経済界に身を置いているものとして、その人の良さがぬるま湯的な中に温存されて、横浜人の自信のなさ

につながっていくような気がしている。東京へのまぶしいスポットライトの影で横浜の燈は、外から見えることなき光となっているのではないだろうか。横浜人は、自分達のふるさとが、このまま次代に受け継がれてよいと思っているのだろうか。もしそうだとしたら、愛情のない、無責任な人達の集まりになってしまうだろう。

横浜で、よく新住民の東京指向を嘆く声が聞かれるが、彼等だけでなく、戦後三十四年間を、リードした人達のほとんどが、同じ傾向をもっていなかっただろうか。人口二百七十万人を擁する大都会になりながら、誇れるものは、昔ながらの港だけという現在の姿を考えてみると、開港以来百二十数年を、無為に過ごしてきた感すらある。

しかしながら、幸いにして、横浜には、いまだに国際都市としての雰囲気と、緑多き田園が、いくらか残っている。このフイーリングを大切に、国際都市にふさわしい、国際的情報中枢機能を有する機関(各国留学生を受け入れる機能を含む)の設立。そして緑多き田園に、各種の研究開発機関の誘致を試みたらどうだろう。

個性ある都市造りは、その市民が、他の都市では味わえない独創性にふれ、それを意識したところから形成される

ものだと思ふ。おらが町で入手した情報、おらが町で生まれた人類に寄与する研究等に接し、各界の指導者に、自信をよみがえらせることが、今の横浜造りに、急務ではないだろうか。自信をもったわが町を愛する人達に、リードされるならば、人々は自分の町に誇りを感じずるであろうし、さらに大きな希望と夢を育むために、多くの知恵を發揮するだろう。そのためにも、経済人が、真のボランティア運動を、推進する必要がある。私の知る限りでは、多くの経営、経済人は、少しの慈善的行為に満足し、真にその都市に愛着を感じた行為をしてきただろうか疑問に思う。厳しい経済の波にもまれた経験、体験を生かし、その都市のもつ悩みの解消に努力することが大切であると思う。

(若葉運輸幹社長)

都心臨海部の再開発とうるおいのある地域づくり

吉田 次郎 (戸塚区 48歳)

テーブルに横浜五万分の一の地図を広げてじつと見入る。すると私がこれまで生まれ、育ち、生活してきた市内のあちこちの情景が浮んでくる。

それだけに私にとって横浜の「きのう、今日、あした」は、私が県行政にたずさわっていることを別としても、一市民として大きな関心を持たざるをえない。

というわけで一市民の立場から、あすの横浜のすがたについて、思いつくままではあるが記させていただく。

○臨海都心部に都市中枢管理機能を

神奈川の顔は横浜であり、横浜の顔は西区から中区にかけての臨海部であるといつてよい。横浜港最奥部の高島ふ頭に船から上陸すると、右手に国鉄高島ヤードから横浜駅東口開発地区、左手に三菱横浜造船所から東横浜貨物ヤード、新港ふ頭へと続く。地理的にみるとこの一帯が横浜の都心部のまた中心部でなくてはならない。ここが都心臨海部として再開発されるならば、現在二極化されている関内、伊勢佐木町地区と横浜駅西口業務地区とが再開発地区を媒体として有機的に連けいし、まとまりのある大都心部が形成されるにちがいない。もちろん造船所や鉄道ヤードなどの移転は容易でなく長期的な課題になるであろうが、ぜひあすの横浜のため努力してもらいたい。そして再開発地区には、港ヨコハマにふさわしい都市中枢管理、業務管理機能をどっしりと定着させ、港都横浜の独自性を具備してほ